

ひまわりからの メッセージ

167号

2025.11.10

NPOひまわりの花内
西濃園域
発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

深まり行く秋 柿の木の思い出



今年も早十一月になりました。

庭の柿の木は、昨年は酷暑のせいで実が枯れたまま枝に残っていましたが、今年は例年になくたわわに結んでいます。朝早くからひよどりや仲間を呼んでいる声が聞こえてきます。「私の分も少しは残しておいてね」と鶉に呼びかけてみるのですが、彼らに私の思いなど届きそうになく、仲間が次々に飛び来て、枝を飛び交っています。こんな光景も秋の風情として楽しんではいられないの、ヤメヤメ、私の口には……？と思ったりします。

ところで、先日、甘木小学校を訪ねました。中休みになり、支援学級に在籍する子ども達が校庭を案内してくるというので、一緒に外に出ました。遊具の紹介をしてくれたり、ジャンブルジムの一番上まで上がって私に上るよう

勧めてくれたり、菜園のオクラが大きく固くなっているのを一緒に確かめたり、「ここは、一、二年が集まる所だよ」と、背の低い鉄棒や砂場を案内してくれたり、不意の来客である私に、精一杯のおもてなしをしてくれました。子どもたちは足が速いので私は、つい「待つて、待つて」と言うのですが、そうすると足を止めて待つてくれる優しい子ども達でした。

校庭の隅には、何本かの樹がありました。その中の一本は、枝があちこち切りとられていて、「ほら、登ってみてよ」と誘いかけてくれているようでした。今の子ども達には木登りなど許されないのでしょうか、おそらく昔の子ども達はこの樹に登って遊んだのではないかと想像したのでした。そして遠い昔の楽しかった木登りを思い出しました。「どんなに太くても柿の木だけは登っては駄目だよ」と諭されたものでした。柿の枝はもろく、どんなに太そうに見えても折れやすいのだと教えられたのでした。今の子ども達はもちろん、若い先生方もご存知ないことでしょうか。いや、木登りの経験する方の方がほとんどなのでしょう。校庭の樹に「淋しいよね……」と心の中で呼びかけたことでした。

その時、ちょうど始業のチャイムが鳴り、子ども達に「早く早く」と急かされて教室に戻ったのでした。子ども達からも樹々からもエネルギーを一杯もらった一日でした。有難う。

大垣女子短大の公開講座

「様々な特性に合った

療育や教育の在り方」



大垣女子短大には「子どもの発達と援助学」というコースがあり、保育士や療育関係者が履習して、文科省が認める「認定療育士」という資格が得られます。

このコースでは、年二回の公開講座があり、八月二日に大垣市民病院小児科の藤井先生、十一月二日には、いかわクリニック院長の井川先生を招いて行われました。

今回は、井川先生の講座について書いてみようと思います。

I. 成長に応じた課題

① 5歳 身辺自立と指示応答性

幼児期に行われている保健センターの健診は、三歳児健診までは、個人の体と心の健康を診ています。身長、体重などと言葉や歩行、移動、認知などです。五歳健診は対人交流や指示応答性、コミュニケーション力、小集団活動の適応力など相手を意識した課題になります。そして、就学時健診では、個人能力として身辺自立と学習の基礎能力、集団能力として集団活動での適応力、場面の切り換えな

どが課題となるでしょう。

② 10歳 個人的能力確立の課題

自立活動の項目は六区分二十七項目あります。

1. 健康の保持 2. 心理的安定 3. 人間関係の形成

4. 環境の把握 5. 身体の動き 6. コミュニケーションです。

このうち1・4・5は個別 2・3・6は集団活動の中で人とのやりとりに関する項目で、学校でしかできないものです。子どもの脳の成熟は10歳位と言われるのは、これ以後は脳細胞は増えていきかないのです。しかし、これ以後は対人を意識した活動が増え神経ネットワークが頻繁になっていきます。

③ 14歳 集団協調を求められる時期



小学校高学年からは、他児との協調性が評価されます。委員会活動など役割分担と責任、様々な他者とのつき合い、状況にふさわしい行動や言動への切りかえ、目的遂行や援助要求、修正などの実行機能など協調性がないと集団の中で支障が出て来て不登校や精神症状が生じてきます。

④ 14歳 社会性成長の課題

この年齢以上になると、勤勉スキル、チーム力、安定感シンキング力が課題になると言われます。つまり職業意識が入ってきます。注意集中、活動の継続性、中断や修正、

ストレスコントロールや人との誠実な対応、計画力や創造力、肯定的な見方ができる力なども課されてきます。

この様に年齢に応じて課題が変わってくるということですね。

II 支援別の課題

幼児の療育機関や放課後等デイサービスでは福祉の5領域で支援計画が立てられます。学校に行くと自立活動の6区分、就労は日常生活、対人関係作業力、作業への態度の4領域となります。福祉、就労では、自立機能スキル、余暇スキル、対人行動スキル、コミュニケーションスキル、職業行動スキル、職業スキルの6領域というようにその時々で支援課題が示されています。そして職業スキルに関しては、知的能力、言語能力、数理能力、書記的知覚、空間判断力、形態知覚、運動共応、指先の器用さ、手腕の器用さという9項目になっています。全てが個人能力を見る項目になっています。働くというこの意味について考えさせられる項目です。

III 特性別の課題と支援



井川先生は、支援課題の領域をカテゴリー分類をして生活力、適応力、情報処理力、コミュニケーション力、勤勉力に分けてまとめられています。生活力や適応力はこれらの年齢でも必要なことでしょう。

生活力は、健康管理、生活リズムの確立、家族との会話、自分のことは自分でする等は家庭でも大切なことでしょうし、自分で決めたことは自分の気分で変更しないとか、活動時間の確保、状況や他者理解なども生活力に含まれます。

適応力とは、まわりに溶け込む力ですが、周りの状況に対する正しい判断をし、見本の観察、模倣、質問や相談などによって修正していく力も必要です。そして他人に勝手に振り回されないよう、適度の距離感が取れることも必要です。情報処理力には、入力と出力があります。情報を入力するには、中心性統合といふ必要な情報に注目する力が必要ですが、情報は視覚や聴覚など感覚を通して入ってきますから、一人一人の感覚刺激に対する傾向性を知る必要があります。そんな時に有効なのが感覚プロファイルという検査です。では、出力の方はどうかと言うと、子どもの運動発達を中心から末梢へと進みますから、体幹、四肢、手先、発声器官、動眼などに着目していく必要があります。

コミュニケーションで大切なのは、やりとりの態度でしょう。理解したいと思つて話を聞く、わかってほしいと思つて伝える、声かけ、まなざし、ふれあいの仕方など、私たちが心がけることはたくさんあると思います。具体的イメージがわくように表現したり、ネガティブなことはポジティブに変換するトレーニング

かなど、落ちついたやりとりをするために私たちが支援者として心がけるべきことが多々あるのだと思います。

勤勉力に関しては「働く意思や働くことの理解は、自然に身につくものではない」と、井川先生はおっしゃいました。日常スキル（規則正しい生活リズム、食事マナー、身だしなみ、保清）の獲得、対人スキル（挨拶、返事、謝罪、礼）の獲得、労働習慣の獲得、自己理解などが課題として考えられます。

私たちは、常々「途切れない支援を」と言っていますが、人の一生の中で獲得すべき事柄について、余り深く考えてこなかったのではないだろうか。今だけを見るのではなく、先を見越した支援を考えていく必要がありますね。

小集団の目ざす自己対処プランとは？

幼児の児童発達支援事業所における療育は、個別、ペア、小集団などが行われていて、個別療育では、個人能力の成長をめざしており、ペア療育や母子（二人）療育では、相手とのやりとりをめざしています。では、小集団療育（3、8名）はというと、集団適応をめざし、その中で次の様な13項目の自己対処プランがあげられています。（将来に向けて）
1. 人は皆、自分の思いたいように思い、言いたいように言う傾向があることを知る。

12月の予定

- 3日 ヒアサポート
- 4日 ネットワーク研（もとす）
- 8日 センタ親の会
どなたでも参加
できますので保護
者の方にご紹介くだ
さい。
- 16日 いびかわアール
- 17日 講話
療育スタッフ研
- 成人相談、巡回
相談などもあります。

1日1日を
大切に！



- 2. 自分にも他者にも簡単に変わらない特性があることを理解し容認できる。
 - 3. 「適応とは自分らしさを持ちつつ他者とおつき合ひして周りに溶けこむこと」を知る。
 - 4. 自分の弱い点を知る。
 - 5. 支障が出る誘因（社会的障壁）を知る。
 - 6. 苦痛になった時の自分のストレス反応を知る。
 - 7. 更に拗れた時陥りやすい自分のクライシス状態を知る。
 - 8. 苦痛を感じた時のフルタイム手段やシルターなど一時避難の確保をしておく。
 - 9. 苦痛を感じた時、自分でできる事と出来ない事を知る。（自己対処の限界）
 - 10. 援助や身近な相談相手を二、三人確保しておく。
 - 11. ヘルプサインの出し方やタイミングを知る。
 - 12. 困り果てて孤立しないための手順を知る。
 - 13. 安定安心したら、少しだけ頑張ろうとする気持ちを持つ。
- これらは、私たちにも言えることかもしれませんね。